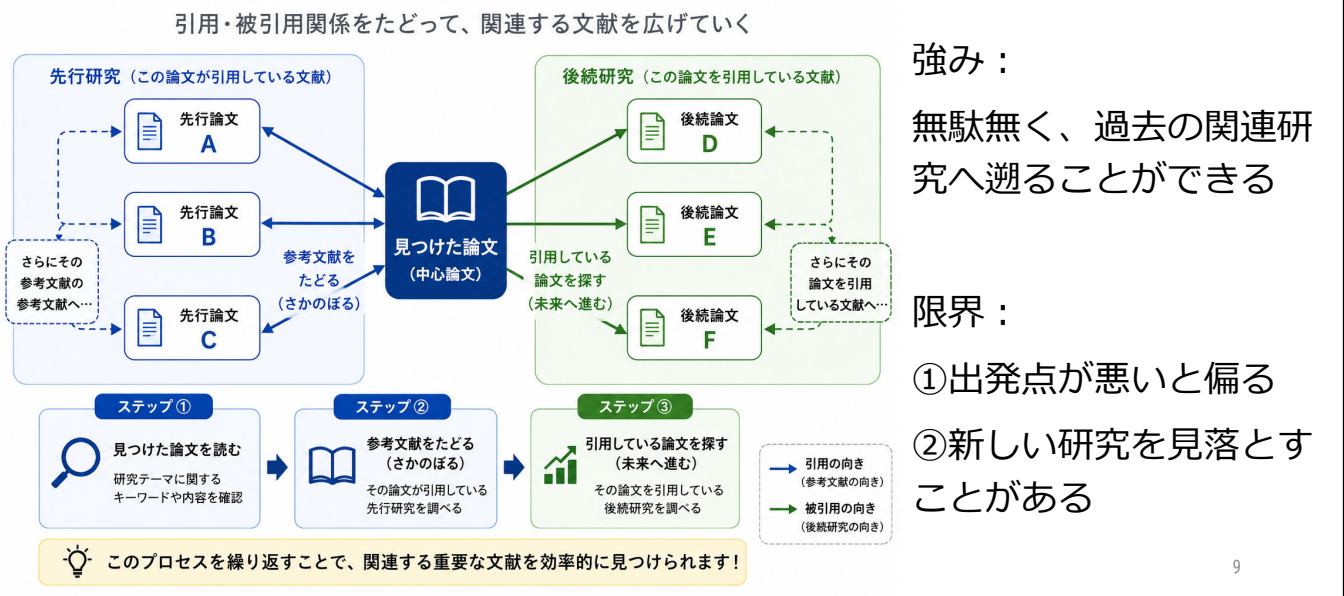


2. 「芋づる式」による 先行研究調査



この章では、先行研究調査のアプローチのうちの1つ、「芋づる式」について詳しくみていきます。

「芋づる式」による先行研究調査：強みとその限界



強み：
無駄無く、過去の関連研究へ遡ることができる

限界：
① 出発点が悪いと偏る
② 新しい研究を見落とすことがある

この図は、芋づる式調査のイメージ図です。

中央に見つけた論文（中心論文）があります。この論文は、過去の研究を引用しながら書かれています（左側の青色部分）。また、この論文自身も後続の研究に引用されていきます（右側の緑色部分）。

このように研究は単独で存在するのではなく、先行研究を引き継ぎながら発展していきます。

雑誌論文や学術書には参考文献リストがあり、引用・参照した文献を明示することが研究のルールです。この参考文献をたどって関連文献を探す方法を「芋づる式調査」と呼びます。

先行研究調査では、中心論文から左側の参考文献をたどることで、研究の流れを効率よく把握できます。キーワード検索よりも関連性の高い文献を見つけやすいことが利点です。

一方で、芋づる式調査の限界は、出発点となる論文に偏りがあると、集まる文献も偏る可能性があるということです。また、新しい論文はまだ引用されていないため見落とししやすいことです。さらに、たどるほど文献数が増える点にも注意が必要です。

なお、図の右側、緑色の部分は、中心論文を引用している後続研究をたどる方法です。後続研究は、Web of Science や Scopus などの引用文献データベースで調べることができます。日本語論文の場合は、後ほど紹介する CiNii Research や J-STAGE に収録されている論文で確認できる場合があります。

研究初期段階における芋づる式の活用法

新しい文献からたどる

新しい文献ほど、それまでの研究成果を踏まえている

基本文献からたどる

研究の流れを把握しやすい

文献の見落としを防ぎやすい

参考文献リストは著者が選んだ文献であり、偏りや漏れが生じることがあります。1つの文献に頼らず、複数の文献からたどりましょう。



10

研究の初期段階で芋づる式調査を活用する際には、2つのポイントがあります。まず1つ目は、新しい文献を起点にすることです。新しい文献ほど、それまでの研究成果を幅広く踏まえていることが多いからです。どの文献からたどり始めるか迷った場合は、できるだけ新しい文献を選ぶとよいでしょう。

2つ目は、専門的な論文ではなく、基本文献を起点にすることです。専門的な論文の参考文献リストは、そのテーマに特化した文献に絞られていることが多く、調査範囲が限定される場合があります。一方で、テーマ全体を概観したレビュー論文や概説書などの基本文献は、研究の流れを把握しやすく、関連文献も幅広く紹介されています。そのため、先行研究調査の初期段階では、まず基本文献から調べ始めることで、文献の見落としを防ぎやすくなります。次に、このような起点となる基本文献について紹介します。

研究初期段階で起点とする基本文献

参考図書（事典・辞書・ハンドブック・便覧など）

用語・テーマの全体像をつかむ

- 学会や専門家グループが編集したものがおすすめ
- 項目ごとに専門家が執筆している事典・ハンドブックは特に有用

概説書・入門書

分野全体をつかむ

- その分野の基本文献が参考文献として紹介されていることが多い
- 初学者向けの文献案内やブックガイドが掲載されていることもある

専門書

研究史をたどる

- 専門書序章などで研究史が整理されていれば、先行研究調査の起点として有効

レビュー論文

関連文献をまとめて見つける

- そのテーマの研究動向を整理した論文
- 多くの関連文献への起点となる
- 「レビュー」「総説」「〇〇の課題と展望」などのタイトルが目印
- 定期的にレビュー論文を掲載する雑誌もある



初めてそのテーマの先行研究調査を行うときに、芋づる式調査の起点として特におすすめなのが、このスライドに示した4種類の文献です。

まず1つ目は、参考図書（事典・辞書など）です。参考図書は、調べたいテーマの全体像や基本的な考え方を把握するための出発点になります。特に、学会や専門家によって編集されたものは信頼性が高く、解説とあわせて参考文献も確認できます。総合図書館A棟2階の参考図書コーナーのほか、一部はデータベースや電子ブックでも利用できます。

2つ目は、概説書・入門書です。概説書や入門書は、その分野の基礎知識を学ぶための学術書です。参考文献として、その分野の基本文献が紹介されていることが多く、初学者向けの読書案内が掲載されている場合もあります。総合図書館では、A棟3・4階の学習用図書エリアや新書コーナーなどで利用できます。

3つ目は、専門書です。専門書は内容が高度ですが、序章などで研究史が整理されていることがあります。研究史の中で繰り返し言及される文献は、その分野で重要な文献である可能性が高く、先行研究調査の起点として有効です。専門書は、A棟3・4階の学習用図書エリアのほか、A棟5階の研究用図書エリアや書庫棟にも所蔵されています。

4つ目は、レビュー論文です。レビュー論文は、あるテーマに関する研究動向を整理し、関連研究をまとめて紹介する論文です。多くの関連文献への入り口となるため、先行研究調査では非常に有用です。タイトルに「レビュー」「総説」「課題と展望」「現状と展望」「回顧と展望」などの語が含まれていることがあります。また、定期的にレビュー論文を掲載する学術雑誌もあります。

研究初期段階で起点とする基本文献

資料の種類	主な役割	向いている場面
参考図書	テーマや用語の全体像を把握する	テーマを決めた直後
概説書・入門書	分野の基本文献を知る	分野全体を学び始める段階
専門書	研究史や主要な論争を把握する	研究テーマを絞り込む段階
レビュー論文	関連研究を効率よく一覧する	先行研究を網羅的に探す段階

「どの文献を起点にすればよいか」を判断するのは、初めて研究に取り組む人には難しいこともあります。

スライドの表に、どの文献をどの場面で使うのが向いているかということを入れてまとめていますので参考にしてください。

まずはご自身で候補の文献を探し、そのうえで指導教員の先生に相談してみるのもよいでしょう。

研究が進むにつれて、注目した文献を手がかりに、自分なりに文献を取捨選択しながら調査できるようになります。それが芽づる式調査の力です。